

ムラのミライ 活動レポート&ニュース

2017年11月号

CONTENTS

Report 1 何をするのか説明がない…不親切すぎる「海外フィールド研修」のワケ

前川香子 ムラのミライ事務局次長／海外事業チーフ

Report 2 猪・鹿・鳥・やっぱり人！～獣害を事例にした目先の現象だけにとらわれないためのメタファシリテーション～

原 康子 ムラのミライ 認定トレーナー

Data ムラのミライ 講師・コンサルタント派遣実績（2017年5月～10月）

News 1 西宮：この夏、開講
「バイバイ・ワンオペ子育て 上手に助け合うためのコミュニケーション講座」

News 2 セネガル：対症療法的な空しい援助へのオルタナティブとは？

Publications 地域づくりで使えるコミュニケーションスキルの理論と実例 本で読む ムラのミライ



認定NPO法人ムラのミライ

高山事務所 〒506-0032 岐阜県高山市千島町900-1 飛驒・世界生活文化センター内

電話 0577-33-4097 Fax 0577-34-5671

関西事務所 〒662-0856 兵庫県西宮市城ヶ堀町2-22 早川総合ビル3F

電話/ Fax 0798-31-7940

E-mail info@muranomirai.org ウェブサイト <http://muranomirai.org/>



本ニュースレターに関するご連絡は、関西事務所までお願いいたします。

Report 1

海外フィールド研修（インド）

何をするのか説明がない…不親切すぎる「海外フィールド研修」のワケ

前川香子 ムラのミライ事務局次長／海外事業チーフ

「貧しい人」がない？！

8日間の研修が始まって3日目か4日目に、ある参加者がその日の振り返りで発言した。

「インドの農村は貧しい、と聞いていたが、まだ「貧困」が見つけれない—」

それは2009年12月、今のフィールド研修スタイルになって記念すべき第一回目での出来事だった。その時はまだ「メタファシリテーション」の言葉も生まれていない時で、ただ、ソムニード（ムラのミライの当時の名称）のもつファシリテーション技術---他とは違うであろう「当事者の主体性を引き出す」技術を広めたい、使う人が増えて欲しい、という願いから始まった。

研修場所は南インドの農村で、2009年当時は「小規模流域管理事業」第1フェーズの2年半が経った頃だった。その頃、30数軒の家が立ち並ぶ村は半分ほどがコンクリート造りの家で、残りは

まだ茅葺屋根を付けた土壁の家だった。2010年頃から、政府の補助もあり段々とコンクリート造りの家への建て替えも進み、2017年の今現在ではもう土壁の家は残っていない。

携帯電話も、2009年当時にはすでにほとんどの家に1台はあり、数軒の家にはテレビや衛星パラボラアンテナも設置してあった。今は、冷蔵庫を持つ家族も出現している。

その頃事業では、すでに1年単位のアクション・プランが策定済みで、それに基づいた土壌流出防止のための石垣の設置やため池の拡張・補強整備なども着々と進んでいた。まだそうした「目に見える」活動は始まったばかりで、しかもその結果（恩恵）もまだ得られていなかった。そのような村で、研修参加者たちは、村人たちにインタビューをしたり村や山の中を歩いて観察したりを繰り返しながら、村の人たちの「暮らし」や「困りごと」を知ろうとしていた。



当時の彼らのやり取りを逐一覚えてはいないが、「ソムニードと活動ができてとても嬉しい」「研修を受けて、〇〇ができるようになって良かった」という通り一辺倒の返事を聞くだけだった初日や2日目。そうではなく、まずは座るように勧めてくれた木枠のベッドのようなモノについて、「これは何ですか?」という質問から始めてみると、関連して森の植生やその利用について、過去から現在までの状況をつぶさに聞いていくことができた。そしてそこで出てきたコメントが、冒頭の「『貧困』がまだ見つからない」というモノだった。

読者の皆さんも、ふと疑問に思われたかもしれないが、私たち講師陣は、そこで参加者に尋ねたのだ。「あなたの言う『貧困』とは何ですか?」

ムラのミライの言う「貧困」は『途上国の人々との話し方』にも書いてあるので、興味のある方はそちらを読んでいただきたいのだが、要は、自分自身で説明できないものは、いくら聞いても見ても分からないという事、さらには今まで明確に考えたことが無かったという事に、参加者は気付いたのだった。

禅問答のようだったスタッフ研修

当時はまだ名前がついていなかったが、2009年に始まったこのフィールド研修は、「メタファシリテーション」に特化したものであり、私や同じく研修講師を務めるインド人同僚が、現場で和田や他の先輩同僚などから受けたOJTの体験にも、大いに基づいている。

例えば、私がインド駐在を始めた2007年当初に受けたスタッフ研修での一場面を紹介しよう。

ある暑い日の午後、カウンターパートNGOのSOMNEED Indiaの代表がおもむろに1リットルのペットボトルを目の前にドン、と置いて私たちに問うた。

「この状態から、何が問題なのか言ってみろ」

そのボトルには半分も水が残っていない。その場にいたのは7~8人ほどで、他に水の入ったペットボトルはない。

はっきり言って、その時は問い自体も分かりにくく（だからこれを読んでいる皆さんも良く分からないとは思いますが）、その人の真意を図りながら回答したものだ。結局のところ、「まだ研修時間も残っているし、みんな水が飲みたいのに、全員が満腹に飲めるだけの量が残っていない」ということであり、一言で言うと「マネージメントができていない」ということだった。

つまり、困っていることに対処しても（=ボトルを次々に与える）、問題が解決しない（=マネージメント能力がつかない）限り、いつまでも同じ状況が繰り返される、ということを経験したのだ。と言っても、その場で回答や解説はもらえず、このようにきちんと解釈できるようになったのは、OJTからだいぶ経ち、村での小規模流域管理事業にどっぷり携わるようになってからだったが。さらに、「自立」や「エンパワーメント」「持続可能性」等など途上国のフィールドではよく耳にする言葉であるが、これら用語も10歳の子どもでも8歳のお年寄りでもわかるように説明できなければ、結局のところ自分自身がよく分かっていないのだ、ということも身をもって知り、そして、今はフィールド研修で参加者が必ずぶち当たる壁である。



フィールド研修での出来事1：眺めていたら観察できるの？

これ以外にも、観察や情報の整理についてなどOJTの連続だったが、当時は、繰り返すが、まだ和田自身も「メタファシリテーション」を言語化・体系化できておらず、解説がないのがほとんどで、時には私の質問にも答えてくれない時もあったものだ。

2009年から続く「コミュニティ開発フィールド研修」は、私たちがこのようなOJTで会得し、今は言語化、体系化された「メタファシリテーション」のスキルを学び、実践する場として提供している。

その時々参加者の属性や関心事（教育、自然資源の管理、衛生etc）に沿い、そしてその日その日の理解度や疑問点に基づいて、ディスカッションやフィールドの課題を設定しているため、研修のスケジュール（内容）は決まっているようで決まっていない。毎回、参加者の数名は「ほとんど何をするのか明示されていない研修で、申し込みの時も実は不安だった」と胸の内を明かしてくれる。但し、基本的スキルである「事実質問」「観察」「対等な関係の築き方」「対話の始め方」「質問を途切れなく続ける方法」などは必ず研修期間中に学べるようになっていくことは、ここに明示しておこう。

「観察」に関する場面を紹介しよう。去年実施したフィールド研修（ビギナーズ向け）のある1日では、都市スラムの中を歩き、住民と話をし、振り返りのための研修会場に戻った後で、「今日行ったスラムの入り口から、（スラムの中にある）訪問した家までの地図を描いてください」と課題を出した。



すると、参加者全員で必死に思い出すのだが、ほとんど描けなかった。道順だけでなく、建物は2階建てなのか3階建てなのか、路地には何を売っている人たちがいて、電線はあったのかなかったのか、水に関するものは何かあったのかなかったのか、等々がまるで記憶に残っていない。その時の参加者の多くの関心事は、「水」や「人々の暮らし」だった。ここで更に問うたのは、「朝顔（あるいはヒマワリやヘチマ）の観察を、小学生の時にしたことがありますか？」「その観察と、通勤・通学路で朝顔が咲いているな、と見るのと何が違いますか？」ということだ。

こうして自分たちの経験にも基づき、考えて発見していくことで、観察のポイントが分かるようになり、次の日のフィールドから自然と観察をしていけるようになった。観察ができるようになると、インタビューとも関連づけられる。そしてフィールドを重ねる毎に、振り返りの時間の地図の完成度も高くなり、つまりは、何の情報を得ないといけないのか、そしてそれは相手の思い込みか、それとも事実なのか、ということを観察と質問でできるようになっていったのだ。

フィールド研修での出来事2：相手に気づきを促す

メタファシリテーションの核である「相手に気づきを促す」という点においても、研修期間中に体感できる場合とそうでない場合があるが、ある年の研修では、同じ村を二度目に訪問した時に、参加者の一人がまさしくそういう瞬間を体験した。場所は村の裏手にある大きなタマリンドの木が立つ広場だが、そこに散乱しているプラスチックの袋やお菓子のパッケージなどを指さして、「これは何ですか」の質問から対話を始めた。



村の30代の青年が「袋だよ。ゴミだよ。」と答えた。「誰がここに捨てたか知っていますか？」と更に質問を重ねていくと、子どもたちがここでよくお菓子を食べながら遊んで、そのまま捨てていることや、大人である自分たちも捨ててしまっていること、家の中で今朝出たゴミも適当にこの広場に捨てていることなどが分かってきた。そして、その時村の人たちが取り組んでいた有機農業での堆肥りの材料に関して聞いていくと（1回目の訪問時に見ていた）、プラスチック類は土に還らないから堆肥には絶対に混ぜない、ということを村人が言った。その時、広場には8名ほどの村人たちがいたのだが、その内の一人が、やり取りを聞いていて「そうだよ」と発言した。「ミミズとか微生物が食べられないから堆肥には混ぜないのだから、堆肥だけじゃなくてこの広場でも結局は土には還らない。ダメだよ。」

それからその場にいた青年たちは何やらゴソゴソと話し合っ、「とりあえず、まずは捨てる場所を一か所にすることから始めよう」と決意した。

この時の参加者は、「堆肥には絶対に混ぜない」という言葉を聞いてから、意図せずしばらく沈黙していたのだが、それが待つという時間にながっていたのだ。

この時以降、その村の広場のプラスチックのゴミはしばらく一か所に集まっていたが、すぐにまた散らかすようになっていた。しかしながら、事業の終盤で策定した村の中期計画「ビジョン2020」では、プラスチックゴミについても、減らす行動計画を盛り込んでいた。

イメージではなくリアルな姿をつかみ取る

「相手に気付きを促す」前に、質問者自身もその村の事や相手の事を知らないといけないので、初日から相手が「そうだ！」と何かに気付くことはほぼ無い。また、研修期間中に、このような明確な場面に遭遇することもあればそうでないことももちろんある。しかしながら、参加者たちは「南インドの村」という大きな括りや一般論ではなく、訪れている「ポガダヴァリ村」、「ブータラグダ村」の状況を詳細に知ることができたのだ。

そうすると、冒頭のような「貧困」に関する意見は、最近でも研修前半にやっぱり聞こえてくるのだが、参加者たちは異口同音に、最終的には次のようなコメントを残してインドを去っていく。

「重要なのは、『貧困がある・無い』というのではなく、村でもどこでもまず事実を知ることから始めないといけないということ、私は何も知らないのだ、という当たり前のことに気付いた」

最後に、このフィールド研修のコンセプトを体感・理解してくれた参加者のコメントで、紙面を終わらせよう。

「毎日がフィールド実践、そして振り返りという5日間の研修構成はゆっくりだけど、自分で体験して自分で振り返り、そして翌日の課題を自分たちで設定できたのがよかった。講師たちはすぐに何かを教えるのではなかったけど、それは、私たち参加者が気づくまで待っていたんだと、今ならわかる。そしてそれがファシリテーションということだと思う。」

Report 2

国内フィールド研修（岐阜県郡上市）

猪・鹿・鳥・やっぱり人！
～獣害を事例にした目先の現象だけにとらわれないためのメタファシリテーション～

原 康子 ムラのミライ 認定トレーナー



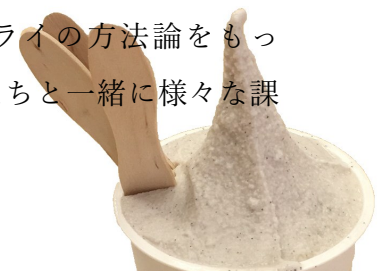
ジェラート職人のこだわり、 ムラのミライのこだわり

これからご紹介するのは、2017年5月に岐阜県郡上市で開催された2泊3日のフィールド研修です。と、その前に。時々、むしように食べたくなるのが、ジェラート。

ジェラートは「さっぱり」しているのに「濃厚」。搾りたての牛乳や旬のフルーツなどを使い、素材の持ち味を最大限に活かして、なめらかな舌触りとコクを作り出します。京都に住む私のお気に入りのジェラート店は、私と同じ岐阜県出身のジェラート職人（ジェラティエーレ）のお店。彼女はイタリアで修業し、日本全国を旅して、その地特有の、しかも安心で、安全で、旬の素材を見出し、日々のジェラート作りに利用しています。沖縄の黒糖、愛知の完熟ピンクルビー

（グレープフルーツ）、広島瀬戸田レモン、丹波黒豆のきなこなど、その素材は様々ですが、しかし「おいしいジェラートの作り方」は同じです。

このジェラート職人のつくるジェラート、ムラのミライとなんだか似ています。「ここに住み続けたいと思えるコミュニティー（ムラ）を作りたい」という思い、そしてその思いを形にするための方法論は同じ。ただし、その素材は1つではありません。ここでジェラートの様々な素材にあたるのは、世界や日本の各地でそれぞれ取り組む課題です。日本での獣害や子育て、ネパールでの環境教育、セネガルでの青年農家育成、イランの地下水の枯渇など。ムラのミライの方法論をもって、各地で活動する人たちと一緒に様々な課題に取り組んでいます。



ところで、搾りたての新鮮な牛乳は美味しいジェラートのもととなる原料ですが、ムラのミライにも地域の課題を考えるとときに不可欠な「原料」があります。それが『“〇〇が問題だ”と言われるようになった文脈（コンテキスト）』です。このコンテキストを見出し、理解する力が、地域の課題に取り組み、新しい地域を作り出すために不可欠なのです。

さて、以下は「そんな力を身につけたい！」という人たちが集まった郡上での研修、『獣害対策から地域づくりへ「猪！鹿！鳥！やっぱりヒト！」集落の現実を見るメタファシリテーション・スキルのススメ！！』のご報告です。

五月晴れのゴールデンウィーク。北は青森から南は広島まで、全国津々浦々から集まった参加者の皆さん。高速道路を何時間も運転し、電車を何本も乗り継いで、駅を降りたら20分ほど山道を行き、県道もそろそろ終点かな、というところに広

がる溪谷沿いの集落が今回の研修会場です。2度目となる母袋（もたい）集落での研修には、前回（2016年11月）同様、母袋集落の皆さんと猪鹿庁（郡上里山株式会社）にご協力いただきました。

全国から集まった参加者は、研修テーマの「獣害」の専門家が9名、その他、医療、国際協力分野、行政機関、教育、まちづくり関係の方々と様々な背景を持つ方たちでした。

郡上での研修で「分かったこと」「分からなくなったこと」

さて、いきなりですが、研修の中身をお話しする前に、研修最終日の参加者からの感想を一部、ご紹介します。

■拡大造林や養蚕の歴史など知識としては知っていたが、今回「文脈を理解すること」を学び、自分の中でバラバラだったピースが埋まった気がした。

研修スケジュール

日	内容	形式（講義／フィールド等）
1日目 (5月4日)	「事実質問をつなげ、文脈を理解する」とは どういうことか	講義
	4グループに分かれて集落の方のお話を聞く	事実質問実践フィールドワーク1
	交流会で集落の方のお話を聞く	参加者と集落の方との交流会
2日目 (5月5日)	集落歩きと交流会で得た情報共有1	グループ発表と講義
	講師のコメントを反映して2回目のフィールドワーク：4グループに分かれて集落の方のお話を聞く	事実質問実践フィールドワーク2
	集落歩きで得た情報の共有2	グループ発表と講義
	母袋年表作成	グループワーク
3日目 (5月6日)	年表から分かることの発表	グループ発表
	まとめ「事実質問で描く集落の過去から現在」	講義
	質疑応答	質疑応答

■どうやって集落にアプローチをしたらよいかずっと知りたかった。「問題がありますねえ、困りましたね」で終わらないアプローチの方法がわかった。

■成果は「自分」と「相手（集落）」で作るといふ点が腑に落ちた。私も「当事者」として相手（集落）と未来を作っていくことが大事だと理解できた。

■今回学んだ技術を使って、「支援する人」「支援される人」という一方的な関係でなく、お互いに最善の問題解決法を作っていきたいと思った。

■「相手の行動変容をいかに促すか」という技術を学ぶつもりが、私自身が「自分はどうなのか？」と問われていた3日間で、頭が混乱している。

■個人に対して働きかけてゆくこと以外に、集落の複数の人に1度にアプローチする機会も多い。アプローチの方法を自分で考えて思考錯誤しているが、次回は集団にはたらきかける手法を学びたい。

では、このような感想が出て来る研修の中身をご紹介します。研修に参加しているような気持ちで読んでみてください。

事実質問で「〇〇が問題だ！」と言われるようになった文脈を理解する

まず初日の自己紹介の後、参加者は「獣害、地域おこし、ファシリテーションという言葉は、

いったん全部忘れてください。（そのかわり）地域の皆さんにお話を聞くとき、様々な観察をするとき文脈（コンテキスト）を意識して下さい。」と講師の和田信明（*）から言われます。

さてここでいう「文脈（コンテキスト）」とは何のことでしょう？

和田はこう言います。“獣害というのは病気なのか、病気の症状なのか、それはまだ今の時点（集落を見ていない段階）ではわかっていません。たとえば風邪をひく人とひかない人が必ずいます。

「流行っている」だけで風邪をひくなら皆、風邪をひきます。「風邪をひく」というのは「症状」です。必ずその症状には、風邪をひいた人が「どういう生活をしてきたか」という文脈（コンテキスト）があります。まずは事実質問を使って、虚心坦懐に集落の方に事実を聞きながら、集落を歩いてきてください。”こう言われた参加者は4つのグループに分かれて、集落を歩きました。この研修の参加条件の1つに「メタファシリテーション基礎講座を受けること」がありますので、その講座で習った理論を各自実践すべく、集落の方に事実質問をしてゆきました。集落でお話を聞かせてくださった方は、60代から80代の方が中心でした。私たちが集落を訪れることを回覧板で事前に知っていたようで、皆さん、快くお話を聞かせてくださいました。

集落歩きから戻ると、グループごとに発表です。和田は参加者に次々と質問をしてゆきます。参加者が「聞いたこと」「聞かなかつこと」を明確にしてゆくのです。例えば次のように。

*和田信明は、『途上国の人々との話し方～国際協力メタファシリテーションの手法』みずのわ出版（2010年）の著者の1人で、ムラのミライ設立者。現在は、ムラのミライ専属コンサルタント。

農業が好きで、Nさんの家の畑を借りて農業をされている兼業農家のTさん（60代男性）。鹿、猿、イノシシ、ハクビシン、カモシカの被害がある。サルにはトマト、キュウリをいっぱい食べられる。柵を張ったのは3年前。鹿用の柵ではイノシシが入ってきてしまう。イノシシの被害は8月が多いので、6月中にイノシシ用の電気柵をはる予定。

（和田）この方は農業を始めてから何年ですか？

（参加者）数年前としか聞いていません。

（和田）その前はどこで、何のお仕事をされていましたか？

（参加者）郡上市内で、いろんな仕事と聞きましたが、詳しくは聞いていません。

（和田）具体的な被害について聞きましたか？例えば何がどのくらい食べられたのか？全く収穫ができなかったのですか？

（参加者）トマトやキュウリが被害にあったとだけで、どのくらいという量は聞いてません。

こんなやりとりを繰り返します。和田から細かい質問を受けた参加者は、次の集落歩きでは、さらに質問を細かくして事実を聞いていきます。

事実質問がつなげてゆけるようになると、「育てているのは何ですか？」「トマトです」で会話は終わりません。「トマト」をさらに分解することができるようになります。「トマト」の「苗」「肥料」「水」「道具」「栽培方法」など、それぞれについて「いつから」「どこから」「だれから」「どのくらい」と分解してゆくことで、「トマト」を通じた集落の過去が浮かび上がってきます。こうして集落歩きを重ねるごとに、次から次に事実質問を続けてゆく技術を身体で覚えてゆきます。とはいえ1日や2日ですぐに事実質問がつなげられるようになるなら、それは技術とは言えません。ひたすら練習が必要です。2度目のグループ発表では、1回目よりさらに多くの「集落の過去」の事実が明らかになりました。しかし、事実を持ち寄っただけでは、単に「そういう過去があったのですね」というだけで終わりです。

集落の方の個人史を集めると、母袋集落全体の歴史が浮かび上がってきます。次に必要なのは、分析です。研修2日目の夕方、参加者はグループ毎に「母袋集落の年表を作る」ことになりました。

最終日は、この年表をみて「分かったこと」の発表をしました。



獣害も生活習慣病と同じく、「これが原因だ」という1つの決定的原因があるわけではありません。集落を取り巻く自然環境にとって、集落に暮らす「人」にとって、そして「獣」にとって、好ましくない習慣や環境が気づかないうちに積み重なり、ある日突然「害」となって現れたのです。獣や自然環境にしてみれば、それは「人害」で、人にとっては「自然災害」や「獣害」です。決定的な変化は戦後のある時期からジワジワと始まり、集落で暮らしている「人」は変わらないのに、「暮らし方」と彼らを「取り巻く環境」に劇的な変化が生じます。ここでは詳しく述べませんが、ジグソーパズルのピースを埋めていくように過去の事実を集め、「ここが分かれ道(分岐点)」といういくつかの出来事を見つけていきます。集落の人と外から働き掛ける人が共にこの作業を行うことが分析の第一歩です。この共同作業に有効な道具の1つが、集落の年表でした。

文脈（コンテキスト）の理解の先にあるもの

「なんのためにジグソーパズルのピースを埋めるのですか?」と参加者の1人が質問しました。様々な答えがありますが、「最終的に将来打つ手、その地域独自の打つ手を探すこと」と和田は答えました。

「今」起こっている「問題」の文脈の理解なく、その問題（症状）だけに対応しようとすることは、「熱（症状）が出ているので解熱剤を飲む」ということに似ています。次から次へと集落

にやってくる外部からの強い力（新しい法律、政策、インフラ工事、種など）に流される前に、立ち止まって考える。そのために、このジグソーパズルを埋める（過去の事実から問題の起こった文脈を理解する）作業は役立ちます。「外からの何かを受け入れることで、このムラはどうなるのか?」「これまでは〇〇だったけど、将来は◎◎というムラにしたい」という計画をたて、それを実行してゆくこと。これが「将来打つ手」です。そのムラに関わる外部の人は、ムラの人に「どうしたいのか?」を問う前に、それを問う「自分」は「どのようなムラをそのムラの人たちと一緒に作っていきたいのか?」を自分に問うことが必要です。その当事者意識がないところでの働きかけは、常に「支援する側」と「支援される側」という関係を生み出し続けます。

この研修で、そうではない関係を一步踏み出すヒントを得た参加者の皆さん。早速、自分の地域で、試行錯誤をしながら研修で学んだ技術を使ってみたいと言っていました。

ジェラートに様々なフレーバーがあるように、今回の研修は猪鹿庁のお声がけで「獣害」がテーマの1つでしたが、テーマは様々です。これを読んで「〇〇が問題だ!」という現在、表面に現れている症状の文脈（コンテキスト）をムラの人たちとムラのミライと一緒に明らかにしてみたい!」と思われた方は、お気軽にお声をかけてください。ようやく書き終えたので、明日はご褒美に、塩甘酒のジェラートを食べに行こうと思っています。

ムラのミライ 講師・コンサルタント派遣実績（2017年5月～10月）

専門家派遣 1件

JICA南アジア部「インド国ヒマーチャル・プラデシュ州森林生態系保全・生計改善事業 技術支援委員会（コミュニティ開発・生計向上分野委員）現地視察」

講師派遣 11件

甲南女子大学、京都大学、青年海外協力隊員有志（インド）、北陸先端科学技術大学院大学、（株）アースアンドヒューマンコーポレーション、（公財）日本障害者リハビリテーション協会、お茶の水女子大学、（公社）大阪社会福祉士会北河内支部、あおもり地球市民ネット、近未来くらしかた研究会、子育てネットワーク西宮

アドバイザー派遣 1件

（特活）AMDA社会開発機構（ミャンマー）



News 1

兵庫県西宮市

この夏、開講 「バイバイ・ワンオペ子育て 上手に助け合うためのコミュニケーション講座」

原 康子 ムラのミライ 認定トレーナー

少し前になりますが「ワンオペ（ワンオペレーションの略）育児を美化している」「産後うつを思い出す」と批判が殺到したコマーシャルを覚えておられる方も多いかと思います。若い母親がたった1人で子育てと家事に追われ、心身ともに疲れ果ててゆく映像の最後に「その時間がいつか宝物になる」という文字が流れました。

数年前からネット上で盛んに登場するようになった「ワンオペ育児」。実はこの「ワンオペ」という育児のかたちは、20万年から10万年前にアフリカで私たちヒト（現生人類）が誕生して以来、人類史至上まったく例のないことなのです。

「ヒトは共同保育者として進化し、基本的に他者の援助無しでは子育てをすることができない（*）」とも言われるほどですから、ヒトの進化の歴史からみて、例の紙おむつのコマーシャルに登場したワンオペ育児は、相当な無理を母親に強いていることになります。

「その時間がいつか宝物になる」と今を耐え、ワンオペという無理を重ねるのではなく、「今この時を宝物にする」ためには「脱ワンオペ」が必

要になってきます。1人で育児をしない、脱ワンオペです。では、どうしたら「脱ワンオペ」が可能になるでしょう？

その第一歩は「助けをもとめられるようになる」ことではないかと思います。そして「助けをもとめる」ためには「対話」が必要になってきます。

ワンオペ育児中は、疲れ果て、どうやって「助けて」と声を上げたらよいかもわからなくなってしまいます。ワンオペ育児はしていないけれど、ワンオペ中の家族、友人、隣人のことが気になる。でも、どのように声をかけてよいかわからない、という人もいます。そんなとき、どちらかが上にも下にも立たず、対等な立場で対話ができれば「助けて」という方も、「助ける」方も、お互いに「助け合える」ための第一歩を踏み出すことができるようになると思います。

そこで、ムラのミライではこれまで対人支援のコミュニケーション手法として国際協力や国内での地域おこしの分野などで高い評価を得ている「対話型ファシリテーション」を子育てに携わる（携わりたい）人たちにも使っていただけるよう、新たに「バイバイ・ワンオペ子育て：上手に助け合うためのコミュニケーション講座」を開講しました。お近くの町での講座開催をご希望の方は、企画・助成金の活用も含め、ムラのミライまでお問合せください。

*サラ・ブラファール・ハーディ『マザーネイチャー「母親」はいかにヒトを進化させたか』早川書房 2005年 塩原通緒訳



写真提供：a little

対症療法的な空しい援助へのオルタナティブとは？

中田豊一 ムラのみらい代表理事

ムラのみらいは、2017年2月からセネガルで、現地NGO、Intermondesと共同で農村青年育成のプロジェクトを開始しました（正式名称「地域資源の循環による農村コミュニティ生計向上プロジェクト～セネガル農村青年層のためのファーマーズ・スクール」）。半乾燥地の3つの村で、出稼ぎに頼らない暮らしを目指して、それぞれ20人前後の若手農民を対象に研修を重ねて行っています。私たちが行うのは、研修を通して彼らの学びを側面から支援することだけです。移動費と昼食を除き、資金的な援助はしません。それでもこれまでの3回、計8日間の研修に、若者たちは毎日真剣な眼差しで参加していました。

森の消失が表土の劣化をもたらし、それが土壌の保水力を奪うため地下水位が低下し水不足が深刻化する。洪水が頻繁に起こるようになり、表土の流出が加速され、結果として作物が育たなくなる。それを防ぐためにはまず、水流を緩和するた

めに必要なあらゆる対策を、持っている資源を最大限に活用しながら実行していくしかない。村の現実と自らの経験の分析を通してこうしたことを深く理解した農民たちは、小さな堰をあちこちに設けたり、植樹や植栽をしたりなど様々に動き始めました。



私たちは個人に働きかけるだけなのに、村単位で動かないと効力がないことに気づいた若者たちが、他の村人にも真剣に働きかけています。これらが、数年のうちには大きな効果をもたらすこと、土壌の改良、作付けと農法の工夫などの技術的な研修はこれと並行してこそ効力があることをインドなどでの実践を通じて、私たちは熟知しています。

やがて彼らが組織の必要性に気付いて申し出てきたなら、「何をする組織ですか。そのためにはどんな仕組みや知識が必要ですか。以前も同じようなことをやったことがありますか」などとたずねながら、マネジメント能力の強化を促します。開発であり、リーダーシップの育成です。

この活動が画期的なのは、研修参加者の真剣さが際立っていることです。これまでのどのプロジェクトでもその点では他の追随を許さないものだったのですが、参加者が課題を自分のことと捉えて、真剣に取り組み出すプロセスが、こんなに早く出現することはなかったと、研修講師を務めた和田も言っています。

それには大きく2つの要素があると思われます。

ひとつは言うまでもなく、私たちの方法論が、ファシリテーションの手法と研修内容の両面でますます完成度を高めてきたことによります。

もう一つには、今回の活動地域の人々にとって、水資源の劣化と表土の急速な喪失が、身近で深刻な問題として、実感をもって捉えられていることがあるとしか考えられません。

改めて振り返ってみると、私が10年以上関わってきたJICA関西での一連の参加型コミュニティ開発研修でも、アフリカから来た研修員にこの課題

への関心を強く示す者が特に多かったようです。

他方、国際社会は、アフリカの貧困を世界の最大課題のひとつとして、様々な取り組みを行っているにも関わらず、なかなか展望は開けないままに、いわゆる「参加型開発」の名のもとに決して持続しない収入向上プロジェクトや、結局は出稼ぎを後押しするだけの教育など、対症療法的な空しい援助を際限なく注ぎ込んでいます。

そうした中、私たちの方法論と手法は、「貧困」という現象を招来する、より根源的な現象（土と水の劣化の問題）に効果的に対処できる唯一無二の、空しくない援助を可能にするものだという確信をより強めています。

この方法の普及と活動の拡大に総力を挙げて取り組むのが、国際協力組織を標榜するムラのミライの使命であると痛感しています。

今後は、この現場を舞台にした研修やスタディツアーなどを企画して、なるべく多くの皆さんに見ていただく機会を作るつもりです。



Books

ムラのミライの方法論と実例が詰まった

書籍のご紹介

化石燃料を軸に現代を解き明かした一冊

ムラの未来・ヒトの未来

化石燃料文明の彼方へ

中田 豊一・和田 信明 著

村の消滅、広がる格差…

近代化する途上国のムラを

分析して見えた

現代の正体とは？

一人ひとりの化石燃料との

付き合い方を変える具体的な

一歩を示しています。定価 1,600円＋税



現場での経験知を誰でも使える手法に

途上国の人々との話し方

国際協力メタファシリテーションの手法

中田 豊一・和田 信明 著

国際協力・コミュニティ開発に

携わる人の必読書として定着し、

青年海外協力隊の研修でも

使用されています。

定価：3,500円＋税

英訳版

Reaching out to Field Reality



人間性を豊かにする社会のあり方とは？

人間性未来論

一原型共同体で築きなおす社会

中田 豊一 著

最新作「ムラの未来・ヒトの未来」へ

と続く思考実験がされた一冊。

本体 1,500円＋送料

(特別価格)



依存関係を生まない新しい国際協力

PKPM ODAの新しい方法論はこれだ

西田 基行 著

やるのは研修だけ、しかも

参加者の自腹!?

メタファシリテーション手法

を育てた、空前絶後の

ODAプロジェクトの記録。

定価 1,500円＋税



そもそも「支援」ってなにをすればいいの？

南国港町おばちゃん信金

原 康子 著

マンガもついて抜群の読み

やすさ！マイクロファイナンス

に関心がある人にもおススメ。

定価 1,800円＋税



現場に行く前に「さくっ」と読める一冊

対話型ファシリテーションの手ほどき

中田 豊一 著

日常生活など身近な

事例中心の、

手軽なブックレット。

定価 700円＋税



ご購入はムラのミライHPへ/ムラのミライ主催研修では消費税抜き特別価格で販売